

長期連載論文

第2回

文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

会長 渡辺豊和

「ムー大陸」、チャーチ ワードの錯覚

二〇世紀の初めイギリスの軍人チャーチワードが今から一万二〇〇〇

年前に太平洋のド真中にあつた北米大陸よりも大きいムー大陸が一夜にして沈んだが、このムー大陸の文明は高度で人々は平和に暮らしていたことを発表した。アトランティスの太平洋版である。チャーチワードは一八六八年、日本の明治維新に当る年にインドの古いヒンズー寺院で古代から伝わる大量のタブレットを見せてもらい以後これの解読研究に明け暮れた。ムー大陸はオーストラリアの北、ポリネシア全域を覆う巨大大陸である。私はアトランティス研究の結果、インドネシアのスラウェシ島こそその場所であることをつきとめたが、このことからムー大陸伝説とアトランティス島伝説はおなじ

事件のことを指しているに違いないと確信するに至った。古代エジプトとインドは頻繁に交易していて情報交換も密であつた。両地に同じ伝説が伝つていても不思議ではない。チャーチワードが得た伝説では超古代の理想文明は南洋性の特徴をもつていたことを克明に伝えている。

さてそのチャーチワードがムーの首都として紹介しているのが現在のミクロネシア連邦の首都のある小島ポナペ島のナン・マドール遺跡である。この遺跡は確かにすごい。ポナペ島自体は小豆島程度の小島なのにこの島の東中央に造られたナン・マドールは南北二〇〇メートル、東西六〇〇メートルの広さに九〇以上の大きいもので一〇〇メートル角小さくて五〇メートル角位の人工島がひしめくヴェニスに似た都市跡である。各島は周囲を六角断面の玄武岩柱を横倒しに積み廻した後にその中にサンゴ殻を推積して造られている。現在ほぼ完全形で残っているのは代々の王の墓地・神殿であつたナ

ン・ドラスだけであるが、これは四方高さ五メートル厚さ二メートル位の重厚な石造壁で囲まれていてその中心に地下室となった墓地神殿が鎮座する。石造建築としては全く特異なもので六角形の玄武岩の柱状石を縦の層と横の層を交互に繰り返して積んでいる。世界に類例はないであろう。しかもその技術は極めて高度である。又海底に沈んでしまった石造建築群もありチャーチワードがムーの首都と思つたのも無理はない。ポナペ島は現在でも人口五万人にも満たないのにナン・マドールには一万人は充分に住めた広さがある。ポナペは孤島であり人が住んでいる島としては東のコスラエ島は八〇〇キロ、西のトラック島も五〇〇キロも遙か彼方にある。ヴェニスにも匹敵する都市をどうして造つたのか全く不思議ではある。チャーチワードは陸続きだった頃のムー大陸時代ならばこの都市が造られても不思議でないと思つたのであろう。しかしそれは残念ながら錯覚であつた。この遺

跡の建造年代は古い部分で一三世紀であり今からせいぜい七〇〇年前のものに過ぎない。しかしこの錯覚を簡単に笑うことは出来ない。この遺跡の養殖池の中から儀式用に養殖したシヤコ貝の化石が見つかつているからである。動物が化石化するためには最低一万年位の年月を必要とするからナン・マドール遺跡の更に古い時期は一万年以上前かもしれないのである。考古学者がこの遺跡建造年代を特定したのは出土した木の実等の食料の炭化具合を測定してのとであり島を造るのに使用した玄武岩から年代を特定することは不可能なのである。と言うことで考古学者の一三世紀建造説はとりあえずの説であるに過ぎない。但し私の見る限りでもこの遺跡の殆どは通説どおり建造は一〇〇〇年を遡ることはあるまい。それよりもこのナン・マドール遺跡を訪れて重大なことに気付いたことの方が大きい。ポナペ島とこれより八〇〇キロ東のコスラエ島は文化的に密接な繋がりがありポナ

ペの最後の王統はコスラエから襲来したと伝えられていて、コスラエ島東部のレロ遺跡もナン・マドールと同じくサンゴ礁の中に作られた都市であり玄武岩を積んだ建造物であるのも変りはない。コスラエ島にはレロ以外にも多くの石造遺跡が島中に散在していてしかも完全形から崩壊してしまつて原形を殆どとどめないものまで様々の崩壊段階のものがそろつている。ポナペのナン・マドールを含めポナペ、コスラエの石造遺跡の特徴は決つた領域の場所に多数のテラスを作ることである。これはハワイなどポリネシア全体に共通する。我が国の高知県足摺岬に四キロ四方に亘つて巨石遺跡が散在し、これの原形の殆どは巨大テラスではないかと予想していたが崩落の跡がさまざまくなかなか原形が復元出来ずにいた。この足摺巨石群はBC三五〇〇年頃の大地震で崩落したらしいことはわかつていた。ところがポナペ・コスラエの諸遺跡の様々の崩壊崩壊段階を見て足摺巨石群のありし

日の姿を想像出来るようになった。足摺巨石群のある地形は海に南面しバラバラを海に向つて開いた形となつている。コスラエにもこれと全くよく似た南面地形がありそこに遺跡群が密集していた。ここの遺跡は古くて一四世紀頃のものであるから足摺とは比べものにならないほど新しい。しかし人間の海や似た地形に対する感覚には時代の古い新しいの差はないであろう。しかも広大な太平洋は同一文明圏に含まれているとのことであり日本はその西北端に当るから足摺にポナペ、コスラエと酷似した石造遺跡があつたとしても特に不思議がることではない。足摺巨石群の中には巨大ピラミッド二基の存在が明かになつていますが何よりもこれは縄文夢通信網の局部拠点として完璧に建造された遺跡であることが重要なのである。

一回目の旅、ギザとスラ

ウエシ

アトランティスがスラウエシであることをつぎとめた私は一九八九年エジプトとスラウエシに行った。エジプトの首都カイロの南西一三キロの所にギザの三大ピラミッドがある。丁度サハラ砂漠の東端にあたり三大ピラミッドの東一キロもするとサハラ砂漠は終わってしまう。ギザとスラウエシと続けて訪れたのではなくトルコのイスタンブールにある日本の東京芸大に当るミマール・スイナ大学に出張する用事がありこの機会を利用してエジプトまで足を伸ばしたというわけである。六月の二〇日過ぎであった。この時は一人旅でありギザを訪れたばかりの朝に持金のほとんどをすられてしまい以後一週間エジプト滞在中何処にも行けなくなってしまう。結局ギザに居るし

がなく毎日三大ピラミッドを眺めていた。ギザ以外に行けた所といえれば北はカイロの国立博物館、南は階段ピラミッドで有名なサツカーラまでであり国立博物館には三度ほど行った。博物館もサツカーラもギザからせいぜい一二三キロでありタクシー代も安かったからである。ソロンにアトランティスのことを語ったのは当時のエジプトの首都サイス（カイロよりも北一三キロ、ナイルデルタの中央にある。但し現在は小村）の神官であった。ソロンは紀元前六世紀に活躍した有名な政治家であるから今から二五〇〇年以上前のことである。当然ソロンがエジプトを訪れた時もギザの三大ピラミッドは存在していた。その時ですら出来てから二〇〇〇年は過ぎていたのである。この三つのピラミッドにアトランティスの位置を示す秘密があった。第一ピラミッド、第二ピラミッドとスフィンクスの位置関係がそうなのであるがそのことはすでにわかっていた。ギザを訪れて山なす三つのピラ

ミッドを見て直接調べることがそれほどあったわけではない。とにかく朝八時開門と同時にピラミッドに行かないと暑くなつてとてもおれたものではない。サハラ砂漠の太陽はギラギラとやたらに暑い。第一ピラミッドの中には入れるのだがどうしてか理由はわからないが内部はむしろ暑い。あの乾燥した砂漠に起立しているのに中の墓室はとくにむしむしするのである。中に入ると言っても廊下や部屋はほんの少しのがらん洞なのであつて殆どは一メートル角の切石で埋まっている。廊下も斜路で上下するのだが時には腰をかがめてしか進めないほど天井が低い。廊下も部屋も裸電球が一灯のみで暗い。王の部屋と女王の部屋があり王の間は相当上がらなければならないがこちらに行く観光客は必ず二三人はいる。ところが延々と降りて行かなければならない女王の間に行く人は殆どいない。たった一人で降つていったがもし廊下を塞がれたらどうなるのだろうか。この日本から遠い所で人知

れずミイラにでもなつてしまふしかあるまいと思うとさすが気持が悪かった。女王の間はせいぜい八帖間ほどの広さであるがここに何も置かれていなかった。王の間はそれよりは広く一〇メートル角はあつたらうか。大きな風呂桶位の石棺が中央に置かれていたがここにはミイラははじめから納められていなかったといわれている。ともあれこのピラミッドは中に人を入れるために造られたわけではなさそうである。王の墓なら死体が置かれていたであろうがどうもその気配ははじめからなかったらしい。そうなら何のために底面が二三〇メートル四方・高さ一四六メートルもある巨大建造物を作らなければならないか。しかも第二ピラミッドもほぼ似た大きさなのだから一層不可思議である。第三ピラミッドは底面一〇五メートル四方、高さ六五メートルであるから二つに比べてずっと小さい。それでも近づいて見るとやはり山のように巨大である。これが三つ重つて見える光景

は壯観というしかない。このギザ行
きから四、五年後であったか妻とウ
イーンに向う途上丁度ギザの上空を
通ったことがある。朝七時頃だった
が下界に見える三大ピラミッドのう
ち第一ピラミッドだけが黄金に輝い
ていた。驚いて妻に言う朝日を受
けて薄赤色には見えるが三つとも同
じよと不審そうにする。もう一度見
るとやはり第一ピラミッドだけが黄
金に輝いていた。その遙か昔、この
ピラミッドが造られた時には表面は
黄金で包まれていたという。その姿
を私は上空から見たのである。ギザ
を訪れた時に第一ピラミッドの中
へ何回も入った。その時私の脳細胞に
変化をもたらしたのか、王の間のむ
し暑さは異常であったが地上四〇メ
ートルの位置にあり雨も滅多に降ら
ないサハラ砂漠にあって普通ならひ
んやりと肌寒いはずの石室がどうし
てむし暑く強い湿気があるのか奇怪
なことではある。日本でも地上四〇
メートルの部屋なら地下の湿気は上
がってこない。況んや雨の降らない

からからの砂漠での湿気はただこと
ではない。これがよくいわれる「ピ
ラミッドパワー」なのか。この時の
エジプト行きで最もその甲斐があつ
たのはカイロの国立博物館で各時代
の王達の等身大の石像を見て古い時
代の王ほど東洋的風貌していること
を知ったことである。目は大きい
鼻は低い。黄色人種の特徴が体のあ
ちこちに顕われていると思えた。又
絵に描かれた古王国時代の人々の顔や
服装は現在のインドネシアの人々と
そっくりそのままなのにも驚いた。
アトランティスはさておきエジプト
も古い時代ほど人々はインドネシア
の人々に風貌も民俗も近かった。こ
の時の旅はこれを確認出来たのが収
穫であった。エジプト行きから二ヶ
月後若い二人の建築家を誘ってイン
ドネシアのジャワとスラウエシに行
った。二人の建築家は東ジャワのポ
ロブドゥールを見たくて同行したの
だが私の目的はスラウエシの先住民
が住むタナ・トラジャである。この
住民トラジャ族がアトランティス遺

民である可能性が高い。もう一つは
中部ジャワのサンギラン。ここから
ジャワ原人が発掘されたがひよつと
したら聖書のいう人間の原郷エデン
の園がそこかもしれないと思つたか
らである。タナ・トラジャはスラウ
エシ島の中部山岳地帯であり標高は
八〇〇メートル。赤道直下というの
に涼しかった。二〇〇〇メートル級
の山々が四周を囲み奈良盆地位の広
さで霧が深くよく雨が降った。但し
スコールである。勿論木は葉が青々
と繁っている。大きな都市はなく二
〇〜三〇軒ほどの集落が散在してい
るが平地の殆どが田圃であるのはジ
ャワと変りはないが森の中にある環
状列石が特異である。高さ四メー
トルもある立石が環状に一〇本ほども
並んでいる。その立石の上に朽た船
型木棺がおかれていたりする。葬式
の後にこうするのだという。トラジ
ャの葬儀は豪華なことでは有名であり
私達も運よくかつての王妃の葬儀を
見ることが出来た。がこのことは後
述に譲るとしてまずは巨大立石のス

トーンサークルである。かつて王子
だった人に会えたが六〇才位であろ
うか、この人の説明ではこのストー
ンサークルは四〇〇〇年以上も前の
ものであり全ての立石には古代文字
が刻まれ死者の偉業をたたえている
とのことであつた。よく見ると確か
に規則正しい線刻がある。しかし現
在のトラジャ族はこの文字が読めな
いらしい。王子は自分達の先祖は今
から四〇〇〇年前にエジプトから渡
来して来たともいった。決して私が
誘導したのではない。同行して通訳
を勤めてくれたアキン、デンパサー
ル大学教授（歴史学）が聞き出して
くれたことであり、アキン教授にエ
ジプトとスラウエシの関係を事前に
話していたわけでもない。この王子
の話は確かに私にここがかつてアト
ランティスだったことを示唆してく
れるに充分であつた。多分彼等の先
祖はアトランティス海没の時に何代
か何十代かかつてエジプトに辿りつ
き、今から四〇〇〇年前、エジプト
の混乱期に故地に逃げ帰つたのであ

ろう。丁度今から四〇〇〇年ほど前エジプトは異民族ヒクソスに征服され一〇〇年間非常な混乱におちいつていた。エジプトからの逃亡伝説であるかどうかははっきりしないがトラジャの神話にも遠い海を越えて渡つて来た英雄達の物語がある。

トラジャの貴族達の墓は高さ二〇メートル縦横も二〇メートルほどの立方体に近い岩に入口が一メートル角と狭いが内部は天井高二・五メートル位、広さ八帖ほどの真四角な穴を掘って遺骸（ミイラである）を納める。勿論一族・家族墓である。立方体のピラミッドというにふさわしい。巨大なストーンサークル、巨岩の墓陵、トラジャ族にはスラウエシの他の民族に見られない習俗が間違はなく残存する。顔も他のインドネシアの人々に比べて心なしか彫が深いく感じられた。貴族は間違なくそうであった。

ギリシア・アトランティ

スカントリーニ島

九三年五月初旬から六月末までのほぼ二ヶ月ギリシア、エジプト、トルコ、インド南部、インドネシアのジャワ、スラウエシと五ヶ国、アトランティス遺民が辿つたに違いない道を逆に巡った。フジ・関西テレビの取材のためにである。この時の一行は私と三人の子供（といっても全て大人）、テレビのスタッフ三人の計七人である。番組は一時間半で「アトランティス夢家族」という。私のアトランティス探しに子供三人が行するのである。当時三人とも大学生で兄は博士課程、妹は修士、末子の弟が四回生であった。この番組は九月に放映された。

ギリシアのアテネを最初の訪問地

としたのはプラトンに敬意を表してである。アテネのアクロポリスの丘にあるバルティノンには間違もなくプラトンの時代にあつたものである。しかしギリシアの目的は何といつてもエーゲ海のサントリーニ島である。サントリーニ島はプラトンの時代よりも九〇〇年前のBC一四〇〇年に大噴火があり島の一部が海没してしまつた。学者によつてはプラトンのアトランティス伝説は九〇〇〇年前

ではなく九〇〇年前であり島の大きさも縦横の長さをそれぞれ一桁小さかつたのを間違つて記述したのではないかとする。もしそうでなかつたらプラトンはホラを吹いたか幻覚をそのまま書いたのだという(図1-1・1-1-2)。

サントリーニ島は現在は外輪山を残して海没した所は内海になつて(図1-6)。BC一四〇〇年の大噴火以前の島は日本であらうなら



図1-6 サントリン火山の地形図
アトランティス大陸の謎 講談社より

小豆島とほぼ同じ大きさだったであろう。直径二〇キロ程の丸い島である。そのうちの約半分が海没し今では弧状になっている。船で島に近づくと塀風状に高い断崖絶壁がそそり立ちそこが海没の時に出来た巨大断層であることが一目でわかる。断層の高さは海面からでも一〇〇メートルは越える。海没の海底も深い所では三〇〇メートル以上であるという。

私達は船でこの島最大の町テラの下の港に着く。ここから階段で一〇〇メートル上れば町であるがまずは断層である。黒ずんでざらざらした岩肌が何とも不気味である。大噴火から三五〇〇年も経っているのに生々しい。多分異常に黒ずんでざらざらした岩肌がそう思わせるのである。日本では見たことのない岩肌である。ここは現在でも活火山なのである。海没でわずかに残った対岸の小島ニア・ケメニから薄い噴煙が立ち登っている。心なしか岩に手を触れると熱い。太陽光を背にしているのにこの熱はどういうことなの

だろうか。塀風状の断崖絶壁は多分これから行くスラウエシで最初に見つけなければならぬ光景であろう。この日の海は静かで美しかった。岩陰で涼をとっている浮世の喧嘩と違いまるで別世界さながらである。しいんとして物音はまるで聞こえてこない、岩に打つ波の音すらなくなってしまうのであった。

しかしここから上がってテラの町に入ったら白壁のいかにもエーゲ海そのものの集落風景が展開している。夕方北端の町イアからテラまで帰る時に二男は走って帰るといふ。一〇キロ強である。私達はワゴン車で帰ったのだが一時間もせずに彼は走って帰って来た。テラは島の中央にある。北端から一時間足らずで走って来る二男を見ていてここは絶対にアトランテイスではあり得ないと思つた。余りに狭いのだ。これほどに狭い島の海没を伝えていくにはプラトンの記述は大袈裟過ぎる。大噴火の時に火山灰の下に埋ってしまったアクロテイク遺跡は確かに豪壮

な宮殿であったことをうかがわさせる。精緻な石造建築であり最盛期ギリシア時代よりも一〇〇〇年も古い遺跡であることを考えるとこの建築は技術的にも高度である。唯それよりも何よりも気になるのはここより南一五キロのクレタ島の存在である。勿論私達はこの島に来る前にクレタ島にも立ち寄つた。有名なクノソスの迷宮跡にも寄つた。BC一四〇〇

年当時クレタのミノア文明は最盛期でありエーゲ海全域を支配していた。クノソスの迷宮は広い。一五〇メートル四方はある建築であり一部は二階建となっている。この当時世界の中心を自負したエジプトですら殆どは平屋の建物であったのに、この迷宮は二階建であり技術の高さを誇っている。勿論遺跡は土台のみで壁は所々に残っているだけであるから今は往時をしのぶことは出来ない。それでもアクロテイクよりは遙かに広大豪壮な宮殿であったことは一目瞭然である。何せたった一つの建物だけで一五〇メートル四方もあり、

宮殿である以上一棟や二棟ではなかつたはずである。プラトンはアトランテイスは当時の全世界を支配していたと書いている。サントリーニ島は間違ひなくミノア文明の傘下になつたからここがエーゲ世界の中心でなかつた。ミノア文明はエーゲ海全域を全世界とする文明でありその中心はクレタ島なのだ。このことからしてもサントリーニ島はアトランテイスではない。

エジプトにアトランテイスの影を見る

今から一万一五〇〇年前インドネシアのスラウエシ島にあつたと思われるアトランテイス島が一夜で海没した。海没する前に幾多の前兆はあ

つたであろうから危険を察知して避難した人々もいたはずである。旧約聖書のノアとその一族のように。高度な文明社会に生きたアトランティスの人々である。避難に成功し何処かの地に辿り着きそこで定着して生活をはじめたとしても避難の時に余程道具その他文明生活を維持出来る種々のものを持参していない限り野蛮化するしかなかったであろう。ロビンソンクルーソーの冒険を思い出してもらえれば納得出来るであろう。現在考古学上都市趾として最古のものとされるのはイスラエルのイエリコでありBC八〇〇〇年のものである。次がトルコ南部のチャタルフユックでBC六五〇〇年で始まるこの都市趾では当時の人々の生活の仕方までわかっている。イエリコは石積みの望楼や城壁が発掘されているが約二〇〇〇人が住んでいた。イエリコはBC六〇〇〇年頃で終るがチャタルフユックはBC六五〇〇年頃に始まりBC五七〇〇年頃で終る。チャタルフユックは一〇〇〇〇戸の家屋が

あり約六〇〇〇人が住んだと考えられている。都市はある一定以上の文明水準に至らない限り成立しないから現在の考古学の知見を信用する限り最初の文明はイスラエルで生れ次いでトルコ中央部に移っていったと見える。次いでメソポタミアでBC三五〇〇年、エジプトのBC三〇〇〇年と続く。但しメソポタミアもエジプトもBC三五〇〇年とBC三〇〇〇年より各五〇〇年前には規模の大きい集落を作っていたからそれぞれ文明化を五〇〇年遡らせてもいいのかもしれない。私はアトランティスを無事避難した人々とその子孫をアトランティス遺民と呼ぶが以上のことからアトランティス遺民はまずイスラエルのイエリコで最初の都市を造り次いでチャタルフユックへと移りそれ以後二つに分かれてメソポタミアとエジプトに入ったと想定している。

この時の旅でエジプトが重要であったのは二つの理由による。一つは古代エジプト人が理想郷としたブン

トを交易先きとしそのプントを克明に描いたレリーフがハトシエプスト女王葬祭殿にありこれを見ること。次にギザの三大ピラミッドが建られた頃BC二七〇〇年頃の王や貴族の生活を活写しているレリーフを見ることであった。プントこそアトランティスでないかと考えていたのと、BC二七〇〇年頃のエジプト人の牛に対する扱いを知りたかった。スラウエシのタナ・トラジャ、インド、チャタルフユック、エジプトは牛を聖獣とする文化を築いた所であるが前回の旅行ではギザで持金をすられピラミッド以外見に廻ることが出来なかったため牛のことは確かめられなかった。今回はそれを充分に果たかった。牛のレリーフはギザの三大ピラミッドの先駆をなしたサッカーラのジェセル王の階段ピラミッドの付属墓の墓室にあった。これは階段ピラミッドよりも古くBC三〇〇〇年頃のもののだが色彩は鮮明で到底五〇〇〇年前に制作されたものとは思えない。階段ピラミッドがピ

ラミッドとしてはエジプト最古であるがそれ以前の墓はマスタバ墳といひ直方体の石造建築、ありていにいえば石の大きな箱の中に王達は埋められたのである。このマスタバの中心に王の石棺が置かれ各室にレリーフが彫られ壁画が描かれている。マスタバ墳は長さ二〇メートル、幅一〇メートル高さ五メートル位でありこれがサッカーラには無数にある。巨大ピラミッドに比べるとゴミみたいである。牛のレリーフはジェセル王の階段ピラミッドから東北三〇〇メートルほどの所にある北のマスタバ群と呼ばれるもののうちのメレルカ墓の室内にあった。サッカーラもサハラ砂漠の只中であるからじりじり暑いのは言うまでもない。しかしマスタバの中はひんやりとして涼しい。今回もギザの第一ピラミッドの王の部屋に一行七人全員入ったがむしろ暑さは変わらぬこれはテレビのスタッフもしきりに頭をひねっていた。今になってもこの原因はわからない。

メレルカ墓の牛のレリーフは葬儀を描写した一連のレリーフのうちの一部である。といっても部屋的一面全てが牛を犠牲としてほうる場面である。葬儀の時に牡牛を犠牲にしたことがこのレリーフではつきりとわかる。

ギザ・サッカーラから南に向いルクソールに行く。前回来る予定だったのに来れなくなってしまう所である。ここはテーベと呼ばれたがギリシアにもテーベという古都がある。アテネの前に栄えた都市である。エジプトのこの都市の名を真似てつけたのか。それともギリシア人が老大国ギリシアを見下して自分達の古都の名をこの町に名付けたのか。

多分後者であろう。

有名な王家の谷はナイル河西岸にあり一本も木の生えていない岩山が延々と続く。その山の中の高さ一〇〇メートルほどの断崖の下に二段のテラス式になっているハトシェプスト女王葬祭殿がある。エジプト三〇〇〇年の歴史の中で女王はハトシェ

プストだけである。有名なクレオパトラはギリシア人のプトレマイオス王朝の女王でありエジプトの王朝の人ではない。葬祭殿はエジプトの建築としても特異な形をしていて唯一人の女王のための建物として特に意識して設計されたに違いない。極めてモダンな印象を受ける。この建物の一階の正面と両側面の壁面一杯に女王が派遣した使節一行がプントに着くまでの海路を克明に描いている。プントの高床建築が描かれているのはプントの王が使節一行を港に迎えていた現場で背景としてであった。二、三棟が描かれ全て同じ形である。卵の下を切った似た山高帽型の屋根を高い柱が支えている。異様な高床建築であり専門家の私ですら全く知らない。学者の通説でプントの最有力地とされるソマリアのかつてあった住居がこれであったはずはない。サッカーラの牛のレリーフも、ハトシェプスト葬祭殿のプントのレリーフともにアトランティスと見做すスラウエシとエジプトとの関連性を確

かめるためには恰好の代物ではある。しかしアトランティスの影を最も濃厚に示すのは何といってもギザの三大ピラミッドであろう。あの整然とした幾何学形こそプラトンが強調したアトランティスの厳正幾何学形の国土・都市のあり方を示している。太陽光に光り輝く砂漠の中でこの三大ピラミッドを眺めているとつくづくそのことを強く感じる。じりじり太陽が照りつける砂漠の中で遠くに離れたり近付いたり何度も行きつ戻りつしたがスフィンクスの存在ともどもアトランティス遺民の何代かに亘る文明再構築の営みが結晶化してここにあると実感していた。これならば運河で碁盤目に整然と分割した国土と堀陸堀と何重にもなった同心円構成の円形都市を作ったアトランティスの人々の末裔に恥じないに違いない。

トルコの世界最古の都市

イスラエルのイエリコがBC八〇〇〇年一説ではBC九〇〇〇年の都市であるからアトランティス海没後五〇〇年後に過ぎない。石造の建築が立ち並ぶ都市であったからアトランティス市(アトランティスの首都)を彷彿させるにはいい例だったに違いないが都市の造り全体がどうであったかはよくわからない。その点チヤタルフユックは人々がどのような住宅に住み、各住宅同志がどう連り合っていたかもはっきりとわかる。しかも六〇〇〇人は住んでいたと思えるから立派な都市趾である(図1-7)。その意味で世界最古の都市といっても間違いない。この旅の前八九年にトルコには来ていてイスタンブールではトルコで当時最も有名な建築家の家に一日間余り、

新石器時代住居区の部分復元図、チャタル・フユック

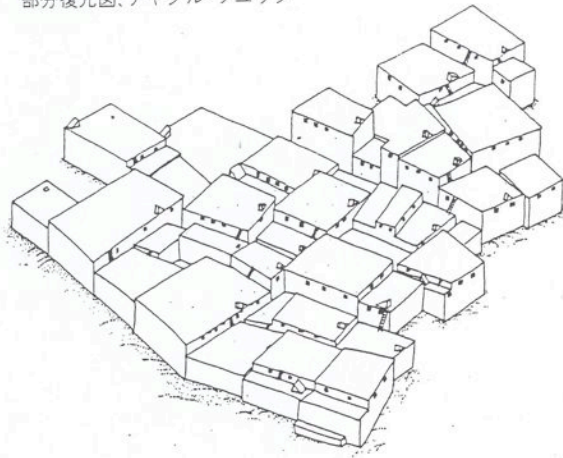


図1-7 新石器時代住居区の部分復元図、チャタルフユック

(図説・世界古代遺跡地図より)

更には首都アンカラの彼の自宅に五日間ほどお世話になっていた。テレビ取材の旅でチャタルフユックに行ったのは私のかねてからの希望でもあったからよかったのだが遺跡は保存のため埋められていて小高い丘になっただけであった。周辺の地形を見れたのは幸であった。相当大きな盆地の中心に位置していた。ぐるりを取り巻く山は一〇〇〇メートル

ル級はあり私の育った秋田縣中央東部の仙北盆地に似ていた。緯度も丁度全く同じ北緯四十度である。チャタルフユックに関しては前節でも書いたし後述するはずであるからここでは省略する。この旅で残念だったのは首都アンカラにある国立博物館に立ち寄った時、以前に来た時は玄関の正面に展示してあったチャタルフユックの復元家屋のインテリアが

取りはずされて見れなかったことである。これが取材出来ていたら番組は更によくなったと惜しまれる。素人の私には番組の作り方などわかるはずもないし第一出来上がった番組にも充分満足はし今でも心から三人のスタッフには感謝しているがもしチャタルフユックのあれが取材出来ていたらダイレクターのT氏はどうしていたであろうかと想像することとはある。

それでは今から八五〇〇年前の住宅のインテリアである(図1-8)。部屋の大きさは八帖二つ分、一六帖は充分にありひよっとしたら二〇帖位はあったかもしれない。建築家の私にすら広い居間位には見えた。天井高は三メートルはありそれ程高いわけではない。煉瓦造家屋の内部であり壁は極めて平らでなめらかで全面真白に塗られていた。床は適当に高い低いがあり変化に富んでいる。現代のヨーロッパの家屋の居間と何ら変らない精巧な室内である。壁に凹凸の装飾が一切ないのが現代風に

見える理由であろう。注目すべきは壁に飾られている牝牛の頭である。展示してあるのは三方の壁で一枚ははずしてあるが正面真中に牛頭三つ三段重ねで壁に掛けてありそのすぐ右隣に牛頭一つが掛けられ更に右の側壁には二つを二段重ねであり計六つの牛頭が壁を飾っていた。壁飾りはこの六個の牛頭のみなのである。チャタルフユック人がいかに牝牛を神聖視していたかはこれでわかる。

この広間は家の中の祀り場であったのであろう。他の一般の部屋よりは格段に広いとことであった。普通の部屋は八帖位である。但しこの広間には炉や壇、ベンチ、かまども備えられていて生活文化程度が相当に高かったことをしのばせる。今から八五〇〇年前、日本では縄文の前期である。当時の日本の住居趾と比較したらこちらの方が遙かに文明的であったのは間違いない。

アンカラはトルコ中央よりやや西側にありトルコの父といわれるケマル・アタチュルクが二〇世紀の前

半に首都として創った都市でありそれ以前は丘の上の小さな中世的都市であった。国立博物館ははじめの大都市のあった丘の上にある。建物は中世の宮殿であり中央に大きなドームを載せている。ここにはトルコの古代の各時代の住居のインテリアが

復元されていたがBC一五〇〇年頃が最盛期であったヒッタイトのものはチャタルフユックよりは退化して見えた。チャタルフユックの復元インテリアを見、更にイエリコの精巧な石造技術を知ってみるとアトランティス海没後の遺民達は決して野蠻

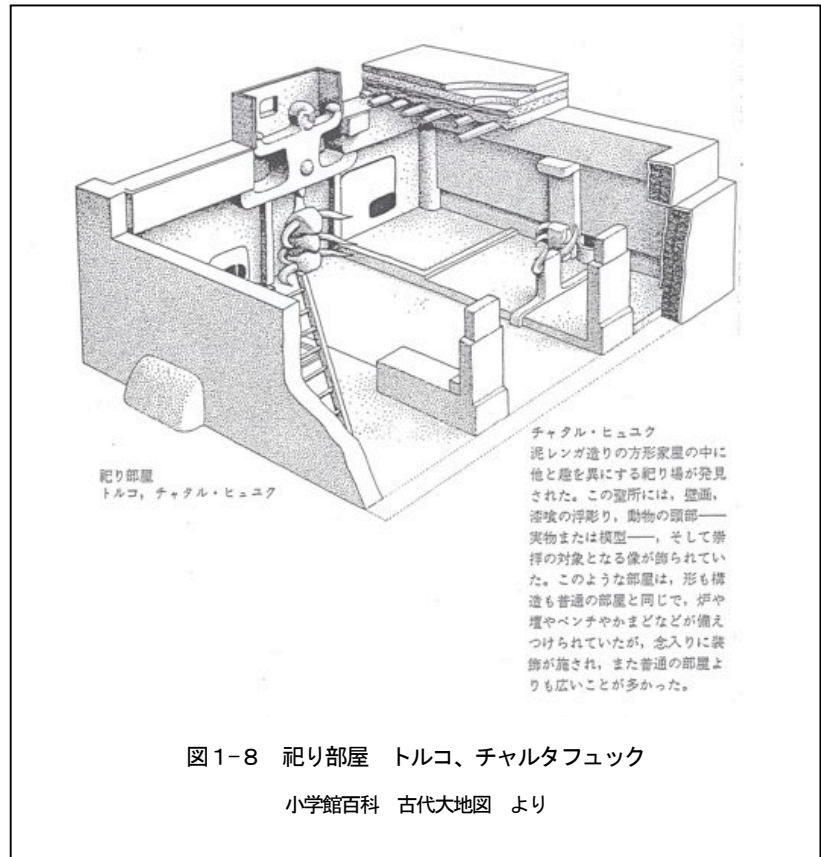


図1-8 祀り部屋 トルコ、チャタルフユック

小学館百科 古代大地図 より

化することがなかったのだと納得出来た。但しそれはインド洋を越えハブ・エルマンデブ狭海から紅海に入りイエリコに辿りつき、チャタルフユックまで行った人々の場合のことである。しかしエジプト文明を興した人々はチャタルフユック以後又紅海を南下し現在のスーダンに上陸し北緯一五度上にある今のハルツーム近辺、多分西一五〇キロ付近に一たん腰を落着けたはずである。しかしこの発掘は行われていない。但しエジプト人はギザのある下エジプトに来る前に南の上エジプトにいたのだが文化レベルは日本の縄文時代前期と変わりなくそれ程高くはなかったことがわかっている。従ってこちらに分派した人々は一度は野蠻化したらしい。

インド、アトランティス

を向く神殿

インドに注目したのは南のタミール州に住むドラヴィダ人と彼等が作り上げた建築を見たからである。それでは何故ドラヴィダ人なのか。世界四大古代文明のうちインド文明は古さではメソポタミア、エジプトの次ぎの三番目に位置し四番目は中国である。インド文明は現在のインドではなくパキスタンのインドス河沿いに花開いた。BC二五〇〇年からBC一五〇〇年のほぼ一〇〇〇年間のことである。BC一〇〇〇年頃に西から移動して来たアリア民族に征服されこの文明は全く姿を消してしまった。モヘンジョダロとハラッパーの二つの都市趾が有名であるが発掘図を見る限りこの二つの都市ともに整然とした碁盤目状の街路で構成されている。その意味では日本の平城京や平安京に近い。但し建物は石造か煉瓦造であるから平城京や平安京のように街路だけがあつて家はパラパラと建っているの

とは違う。建物と街路が一体となった立体都市なのである。粗暴野蛮なアーリア民族に滅されたインダス人はそれ以後杳として行方がわからなといわれていた。しかし最近の研究でタミールのドラヴィダ人こそインダス人の末裔に違いないことになった。ドラヴィダ人自身はそれを示す伝承を持っていたが彼等を貧しく文化レベルが低いと勝手に決めつけ軽蔑して来たアーリア民族はその伝承を認めなかった。欧米の学者もアーリア民族のいうことを信じて来たからインダス人の行方が杳として掴めないことになっていた。というだけのことかもしれない。北のアーリアも南のドラヴィダも牛を聖獣として崇めるのは共通している。かつてインダス人も牛を聖獣としていたことは色々な発掘品から確かめられている。モヘンジョダロとハラッパーの基盤目状都市は厳正な幾何学を使用した町づくりでありエジプト人の感覚によく似ている。エジプトとインダスは頻繁に交易していたことが

知られている。どうみても彼等はよく似た民族だった。ひよっとしたら同一民族であるかもしれない。インドネシアのトラジャ族は今から四〇〇〇年前にエジプトから渡来したと伝えているがそのルートは紅海を南下しインド西北のグジャラートを経てボルネオ、ジャワ、スラウエシと渡って来たのだそうである。今回の旅行では今から五〇〇〇年前とも言われていると解説してくれた人もいた。グジャラートとはインダス河の河口地方である。それならば今から五〇〇〇年前BC三三〇〇年頃エジプトからインダスに入り込んで新天地を拓り開いた人々と先祖の地スラウエシまで帰った人々の二派があったのかもしれない。私はまずドラヴィダ人の風貌を知りたかった。エジプト古王国（BC二八〇〇年頃からBC二一七〇年）時代の王達の風貌そっくりならインダス人はエジプトから渡来した人々か、共通の祖先を持った親縁民族ということになる。タミール州の州都マドラスに着いて

その人々の風貌を見て驚いた。アーリア民族とは明かに違う。とにかく見る人見る人全てがエジプト古王国時代の王の彫像にそっくりなのだ。鼻はそれほど高くはないが目がおそろしく大きい。アーリアとは違い手足はそれほど長くはない。まるで古代エジプト人ではないか。背中に鷹をのせたらギザの第二ピラミッドを造ったカフラー王そっくりになるだろうと思える人にも会った。次に建築である。ヒンズー寺院の門は高さ三〇メートルはゆうに越すが形がエジプトの寺院の門とよく似ている。いわゆる塔門なのである。南インドのヒンズー寺院の特徴の一つがこの塔門でありそれがエジプト神殿の塔門によく似ているのであるからここにもエジプトとインダス・ドラヴィダとの深い繋がりがうかがえる。この塔門の最も古いものがあるからと案内人に連れて行かれたのがマドラスから六〇キロ南の海岸マハーバリプラムである。一番古い塔門は町の中にあり高さ一五メートル程度であり

AD八〇〇年頃のものとのこと。ドラヴィダ人は八〇〇年頃何処からともなくタミールにやって来て以後この住民となったと伝えられている。文献でもそれは確かめられているそうである。そうするとBC一五〇〇年からAD八〇〇年までの二三〇〇年は何処で何をしていたのであろうか。ドラヴィダ人がまずタミールに來てたことが最古の塔門のある寺院を造ったことである。と同時に海岸辺りにも小さな寺院を造った。海岸寺院と呼ばれ階段ピラミッド状の大小二つの塔が隣合った建築で、二塔の周囲をぐるりと多数のねそべった牛の彫刻が取巻いている。建物の軸線の方向を磁石で計ると正確に東南一五度で海を向いている。海はインド洋であるが不思議なことに建物はどう見ても海の方を向いているのに牛の彫像は全て逆向き即ち西北一五度で内陸を向いている。東南一五度とはエジプトのスフィンクスが向く方向である。細かい説明は省くがこれはスラウエシ即ちアトランティ

スの方向なのである。即ちスフィンクスも海岸寺院もスラウエシを向いているのだ。又牛はエジプトのギザの方向を見ている。ドラヴィダ人はタミールに着いてまず海岸に寺院を造ったがそれを彼等にとつて二つの故地スラウエシ、アトランティスとエジプトのギザの方向を望むようにしたのであった。但し町の中に建てた寺院は正確に東西南北を二つの主軸としている。これはピラミッドの四つのそれぞれ斜面が正確に東西南北を向いているのと同じなのである。マハーバリプラムの町の中の寺院は三つの建物が連つて出来ていてギザの三大ピラミッドを想定して造られ海岸寺院はスフィンクスになぞらえられているのかもしれない。

古代エジプト人は自分達は遙か遠くの東にあった原始の海「ヌン」からやって来たたと伝えていたしドラヴィダ人も原始の海の楽園の島から自分達はやって来たると今も伝えている。しかも驚いたことにはその楽園の島は一夜で海に沈んでしまったという

のである。楽園の島とはアトランティスそのものである。原始の海とはアトランティスがあったスラウエシを包む太平洋ジャワ海のことではなかったろうか。いずれにしてもインダス文明人の末裔のドラヴィダ人が古代エジプト人と同様の一夜にして海に沈んだ楽園の伝説を持つていて、しかも自分達はそこから来たというから私のアトランティス遺民の仮説にもわかにか確信性を帯びて来るというものである。

インドネシア、アトラン

ティスの記憶

旅の終着点はインドネシアのスラウエシ島の中部山岳地帯タナ・トラジャである。スラウエシこそアトラ

ンティスでありトラジャ族はその遺民に違いない。タナ・トラジャでも最も注目していたのは葬儀の時の牛の犠牲の仕方である。前にも王妃の葬儀は見たが牛を犠牲にする日ではなかったので残念ながらそれを見るこゝとが出来なかった。インドネシアではバリ島の葬儀も豪華で有名であるが牛を犠牲にすることはない。但し牛の形をした巨大な柩ごと火葬にするのは見た。これもかつては牛の犠牲を伴った記憶かもしれないが今では確かめるすべはない。実はアトランティスでも最大の犠牲祭は牛によるものだったとプラトンは書いている。

ポセイドンの社には牡牛(タウロス)が「犠牲として」放たれていて、十人の王は自分だけやって来て、神の気に入った犠牲を捕えることができるように神に祈った後で鉄の道具を使わないで「木の」棒とわなで狩った、それからそれらが捕えた牡牛

はどの牡牛であろうとそれを柱のところにつれて来て、柱のてっぺんで「そののどを切つて」殺し、書きもものの上に「その血がしたたるようにした」。そして、柱には法律の外に、従わない者どもに大いなる呪いを下したまえと祈る誓いが記されていた。そこで、かれらは、かれら自身の法にしたがつて犠牲を捧げ、牡牛の四肢全部を「焼いて」献じ、かれら各々のために血の凝塊を混合鉢に注入して「葡萄酒」と混合し、まず柱をすつきり清めて、残りを火に投じた。

〔プラトン 『クリティアス』〕

この旅で出会った葬儀は前回ほどの豪壮さではなかったがそれでも故人は身分の高い人であつたらしく葬儀の行列は延々と続いた。奉献物の豚を二人がかりの横棒で吊している様、その群れ更に泣き女の群れなどまるでサッカーラのマスタバ墳の中に描かれていた葬儀の様式そっくり

である。私達も豚を一頭献じたら葬儀の仲間に入れてもらえテントの内部からじつくりと牡牛を犠牲にする様子を見ることが出来た。賓客として扱ってもらえたというわけである。牡牛は刀でノドを切ったからサッカ―ラの絵とよく似ていた。又肢体の切り方も全く同じであったがエジプトの絵になかったことが一つあった。ノドから出て来る血を大きな金属の皿に受けてためその血で土を浄めていたことである。又牛をつないでいた小柱もそれで浄めていた。これはポセイドン社の牡牛の犠牲式と似ている。これこそアトランティスの記憶ではないか。アトランティスも、インダスもチャタルフユックもエジプトも全、牡牛を聖獣として崇めたがメソポタミアや中国は牛を聖獣とすることはしていない。このことはアトランティスを考える場合重要なことかもしれない。メソポタミアと中国はよく似た占星術を駆使したといわれるし何ともこの二つの文明は似通っている。エジプトとインドの

共通性は今まで書いて来たとおりである。メソポタミア、中国が太陰暦でエジプト、インダスが太陽暦であったりして陰陽としてこれらの文明の違いを眺めることが出来るかもしれない。スラウエシに関してはいもう一つ重要なことがある。タナ・トラジャの隣が同族民族といわれるママサ族の住む縣であるがこのママサの魔術は古代エジプトの魔術を現代まで維持して来たのではないかと思わせるほどに面妖である。ママサでは死体蘇生術が今もって行われている。勿論これが出るのは最高の魔術師だけであるのはいうまでもない。このことは今回の旅で知ったのではない。前回の旅の直前に知ったことである。

ある若者が何百キロか遠くの地で死んだという知らせが入った。死体を運ぶには車でもあれば簡単であるうがそこは車の通れる道などついていない場所である、魔術師が唯一人そこに行き若者を生き返らせ山道を共に歩き何日もかかって自分の村に着いたという。しかし若者は完全に蘇生したのではない。まるであやつり人形さながらに魔術師にあやつられわしい山道をそれこそ山を越え谷を越えて歩いて来たのだという。村に着いた若者は再び二度と動かない死体に戻ってしまった。この魔術師は死んだ犬や猫を歩かせるのは朝飯前であるという。このことを知って前回のスラウエシ行きの後たまたま見ていたテレビでママサの魔術師が犬を殺してそれを動かすことが出来るかと試す場面をやっていた。番組を制作したのは日本の民放であった。結果は失敗であり犬はびくとも動かなかった。これでママサの魔術師は大ボラ吹きでありママサ人も同じうそつきときおろされていた。

しかしこれは失敗して当然である。夜であったがわいわいがやがやテレビ取材の一行が騒ぎたて犬と魔術師にライトを浴せて面白半分にならしている。これでは魔術師は精神を集中出来ないであろう。超能力を発動させるにはそこにいる全員が絶対に信じていなければ無理である。一人でも不信感のあるものがあるとその人が沈黙していても超能力者に伝って来て神経が集中しない。いわんや一人にも余るテレビ取材班の全員が面白半分で騒ぎ立ていたら成功する方がむしろ不思議である。魔術師と村人は心をついに死んだ犬を歩かせようとすると成功するのであって不信と不真面目に取り巻かれては何度やっても無駄である。それと魔術師も村人達も金稼ぎのために魔術を発動させたのであって犬を蘇生させて歩かせる必然性に欠けているのも不成功の原因であろう。ママサの魔術は古代エジプトの魔術、更にはアトランティスの魔術、当時については魔術であったがその残存形に違いない。魔術とは現代人が古代の魔術をそう呼ぶだけのことである。